令和５年１２月２４日（日）　東奥日報

地域愛 ２計画進行中

三戸高生、プロの支援受け

カフェ２階改装　利益生む商品開発

県外から生徒を受け入れる「全国募集」導入校となっている三戸町の三戸高校で、キラリと光る二つのプロジェクトが進行している。一つは、町内にあるカフェ2階の高校生による改装計画、もう一つは継続的に販売し、利益を生み出すことを目的にした商品計画プロジェクト。生徒たちは「母校をなくしたくない」「町のために」という思いを持ちつつ、プロのサポートを受け、楽しみながら取り組みを始めている。

（珍田秀樹）

カフェ2階の改装は、同町の元地域おこし協力隊員、西澤剛介さん(34)が経営する同町同心町のカフェ「いなかふぇ　ほっとイレブン」2階の空きスペースを、今年発足した同校の「クリエイティ部」メンバー7人がアイデアを出し、工事にも携わるもの。同カフェは元理容店だった空き家を、西澤さんが基本的に手作業で改装。「町内外の人が気軽に利用できるフリースペースに」との西澤さんの思いに高校生の感性を加え、来年8月ごろの完成を目指す。

18日、同部の活動を支援するコピーライター・写真家の日下慶太さん(47)らとともに店舗を訪れた生徒たちは、西澤さんの考えを聞きながら「公共スペースだと会話ができないので、話をしながら勉強できる場所がほしい」「ドリンクバーを」「個室もあるといいのでは」など、さまざまなアイデアを出した。

19日にはアドバイザーとして関わる国際協力機構（JICA）所属で島根県立大客員教授の髙田健二さん、あおもり留学推進コーディネーターの山谷淳也さんらが見守る中、三戸高校で2階スペースのネーミングに知恵を絞り、地域性や歴史などさまざまな要素を踏まえ、複数候補に絞り込んだ。

今後、西澤さんと相談の上で店舗名やロゴマークをつくるという。

西澤さんは「町内外の全ての人が利用しやすい空間づくりに、高校生がどんなアイデアを出してくれるかわくわくしている」と語る。同部の大平珠来さん(16)は「町全体を盛り上げられるよう、みんなでアイデアを出し合い、すてきな空間にしたい」と話した。

一方、商品開発は町の依頼を受け、みらい探究コースの2年生11人が取り組んでいる。内閣府の地域活性化伝道師でコープおきなわの石原修さん(64)を講師に、話し合いの結果、レトルトカレーを作ることにした。

高校生による商品開発は珍しくないが、同校は販売で利益を上げ、利益を町に還元することを目標に、製造メーカーによるOEM生産を視野に入れている。製造、流通、販売の専門家も話し合いに加わり、発注単位は最低800～千個、継続販売に向けた原料の安定的入手など、プロ目線の難しい課題も突きつけられ、学校給食や防災用の備蓄など、販路にも話が及んだ。今後、試作を経て早くて来年6月以降に販売を開始する方針だ。

石原さんは「高校生はアイデアをたくさん持っている。一人一人の強みを生かせば良い製品ができる」、生徒の市村舞冬さん(17)は「売り上げで町に貢献できるよう頑張りたい」と話した。

【写真上】いなかふぇ2階のスペースで西澤さん㊨の説明を聞く三戸高校クリエイティ部のメンバー

【同下】石原さん（中央）らを交え商品開発について話し合う三戸高校生